

## 10-2 日付紹介 ウエペケレ

### 「オタサムン カムイ ヘカッタラ」解説

語り手：平賀さだも  
聞き手・解説：萱野茂

萱野：えー、昭和44年2月、今日は17日です。平賀さだもさんに uepeker [散文説話] をやってもらいました。今の uepeker はこれ、えー、題は Otasamun kamuy hekattar [オタサムの神様の子どもたち] と、いわゆる、オタサムというのは今風に言えばあの、小樽だとも聞きますが

平賀：小樽

フチ：小樽だね。

萱野：その、小樽にいわゆる神童といいたいでしょうか、神様の子どもと俗に言われながら、わたくしたち2人、兄弟で生活をしておりました。今語っておるのは2人兄弟の弟のほうが、そのいろいろな生活のことを話をしておるわけです。

えっと、わたくしたち兄弟、何不自由なくということは無いわけですね、今の場合は、父もいなければ母もおらずに2人だけが生活をしておった。

ある日のこと兄は「石狩のほうへ遊びに行きたいから行きましょうよ。」というわけでその、わたくしを誘ったので2人で石狩のほうへ遊びに来た。そしてまあ、何十戸かの部落へ来て、そこの酋長の家へ2人で行ったと、そのあたりはまあ他の uepeker [散文説話] に、どれにも出てくるわけですが、非常にそのへんの描写は細かく出て、まあ2人の少年が尋ねて来て、その家へ来る。そして、外で立って戸口をこう叩く、いわゆる、いざないを問うわけですが、そういう場合でも非常にその細かく描写してあります。

そうすると家の中から女の人がそっとその簾を斜めに開けて、そしてそれをその「誰それさんらしき人が来ていますよ。」と家の中へ言うと「それは多分その、小樽の有名な、kamuy hekaci [神様の子ども] ではないだろうか、神様の子どもではないだろうか、すぐに招き、まあ招じ入れたらいいでしょう。」と、というようなことを中で声があった。

すると中では、どの uepeker [散文説話] にもやはり出るんですけども、箒を使った音、それからこう新しい敷物 toma [ござ] といいますがその、ござを敷いておる音、そうしたことなんかがあつて「さあさあ」と言われて中へ入る。そしてあの aynu [アイヌ] ふうに言うといわゆる横座のほうへ兄が座り、その横へわたくしも座ったというふうに始まるわけです。

そしてそこのお爺さんに「どちらからですか?」「小樽から来た」「ああそうでしたか、有名なあの、kamuy hekaci 神の子どもでしたか。」と言われながら話をして、まあ夕方になるとその2人の息子が肉なんかを背負って山から帰って来る。

そうすると、またその人たちも入って来て、まあ型のように挨拶をして、いろいろな話から夜になって、「せっかく遊びに来てくれたのに、何をして皆さん、まあ来たその、kamuy hekaci と言われるその子どもたちに見せたらいいの?」と、まあ相談が始まる。それならその、鹿を

平賀：ukoyukokewe [一緒に協力して鹿を追い出す] と言う。

萱野：うん、ukoyuk'okewe と言ってその鹿を、ぼい [追い] 下ろしてそれをまあ叩いて獲ったり撃って獲ったりというようなそういう、まあ1つの行事みたいな遊びがあるからそれをやろうではないかということに、そこのお爺さんと息子たちが相談して決まったと。

そしてそれからまあ、夜が明けてその山へ行く、そうするとその辺りなんかまあ、昔のその鹿の多いさまが非常によくでておるんですけども、まあ、2隊になって、いわゆる勢子がこう右から左からと、追ってくると、一か所へ鹿がもう、わんさと集まって、それを撃ったり叩いたりしてまあ、獲ったと。そして皮剥ぎが始まったら、1頭の

(電話のベル)

萱野：ん、ん、ん…… どっこいしょ、どこまで言ったんだったけな一つと、

平賀：ん…… ねえ、

萱野：あー、山行って鹿をあれして、え一つと、

平賀：まずその腹切ってみたところ

萱野：うん、腹切ったとこだな。

平賀：腹切るとこだ。

萱野：うんそう。えー iri [皮剥ぎ] が始まって、iri と言うのは皮剥ぎが始まって、皮を剥いでいる1つの組の中で何かその皮剥ぎをしている腹を裂いている時に棒た……棒立ちになって、若い人たちがもう、何ちゅうかな身じろぎもしないというようなことであるのを……いる1組があったと。そしたらそこ、そのうちの若い人がまあ来て私の兄にいうのには、何かその、鹿の腹を裂くと、雄鹿なのにその鹿の腹の中では、子どもだな？うんと、

平賀：子ども an pe [である者] (?) パッ……河童。

萱野：ん？

平賀：河童のこと pon [小さい]

萱野：あーなる (ほど。)

平賀：pon rupne aynu [小さい大人の男] って言うの。

萱野：あーpon rupne aynu ほー

平賀：小人の恐ろしい河童のこと

萱野：あーなるほど、河童のこと

平賀：うん。pon rupne aynu って言えば河童のこと。

萱野：あーなるほどね。その河童が入っていたと。してそれ「どうしたらいいんだろうか？」と言ってきた。それを聞いたらその兄は非常にその顔色を変えて驚いてそれで大急ぎでその、wen nusa [悪い祭壇] と言って aynu はこのいろんな祭壇作る場合でも材料によって、いい神様にあげる祭壇と悪い神様にあげる祭壇があるんだが、その悪い神様にあげるところの材

料使って **nusa** を作れと、祭壇を作れと。それもまあ、6つの種類を作るんだと。それをまあ、大急ぎで作るったらまあ若い人沢山おるので、大急ぎでそれを作った。

そしたら兄だけが行って、まあその、魔物である河童に言うのには、「お前はここへ迷って来たんだと。お前のお嫁になるのは、ずっとずっとあの、**nisositciw imakaketa** [雲を突き抜けたその向こう] と言ったかな？ いや、どこちゅったっけ？

平賀：うん、そう **nisositciw imakakete** と言うから、お日様の入る下っちゅうんだね。

萱野：あーなるほどね。その

平賀：地球の下っちゅうことかな？

萱野：その、いわゆる西の国にずっともう普通では人間も住めないような国へ行くと、行けと。そこではお前を待っている何々の悪い神様……、じゃなくて、まあその河童に言えばお前の連れ合いなる者も待っているから」と、うまく言い含めてさっと身をかかわすと、その兄がそこを離れて……離れると同時に今その腹を裂いた鹿とか、それからその **wen inaw** [悪いイナウ] という悪いイナウと共にその、風を巻いて

平賀：竜巻だ。

萱野：竜巻が起こるようにしてその飛んでいったと。それを見てまあ、村の人たちもほっと胸をなでおろして、まあ家へ帰った。そしたら兄たちはさっそく爺さんに報告をして、「今日はこうこうでした」と。したら、「いや、それはおかげさんで、この村に何か災いが起こるはずが、**kamuy hekaci** であるあんたたちが来てくれたおかげで、何でもない。本当に有難うございました。」と言ってたくさんのお礼の品物と、それから何人かの人を分けってもらって私たちは **Otasam** の私たちの村へ帰って何不自由なく生活をしておりました。

そして、私の兄は **ueinkar** [千里眼で見通す] と言ってその全てのことをこう見通す力があつた人なので、近隣近在の心配事は全部

平賀：千里眼だな。

萱野：うん、全部それを行って治してやったり、どう処置するかということをしてやるので、だんだんだんだん名声も高まり、何不自由なく私たちは生活をしておりましたと、Otasam の kamuy hekaci が言いました。

平賀：hekaci が語ったと。はい（笑）

萱野：えー、というわけでしたね。

平賀：そうよ。

萱野：この uepeker [散文説話] の場合なんかこれまあ私が喋るといづれの場合もそう丁寧に行かないんですけれども、実際はその歩く仕草、矢を撃つ仕草も1つ1つ実にその丁寧に、aynu 風に言うと。矢を撃つ構えから、あるいはあのよその家へ訪ねて行った、あるいは onkami [男性の挨拶] をする挨拶をする仕草ですね。

そうしたことが実に細かにその、出てるまあ、ものなのです。まあこうしたのはいづれ、もうあの一項目ごとに、一項目というか、一言一言区切って、えーまあ活字にする時代があれば、これ非常に嬉しいわけですね。